
川越市

南久我原遺跡

県道大宮上福岡所沢線関係埋蔵文化財発掘調査報告

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



遺跡全景



1号墳周溝覆土 横瓶

序

埼玉県では「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しい92（くに）づくり」を基本理念として、6つの基本施策に沿い県政を進めております。

道路や交通網の整備は、その2つめの施策として、新しい発展と豊かな生活を支える基盤づくりに基づき進められているものです。

県道大宮上福岡所沢線の整備も、県民の豊かな生活を支え、県内の地域間連携を高めるための施策のひとつとして計画されたものです。

ところで、川越市は中世の川越館跡や近世の川越城跡などの史跡も多く、中世以降近世にかけて城下町として栄えた地域です。市南東部に当たる古市場地域にも新河岸川沿いに多くの遺跡が分布しており、今回の道路整備予定地においても埋蔵文化財の所在が知られておりました。これらの遺跡の取り扱いについて関係機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講じることになりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県土木部道路建設課の委託を受け、発掘

調査を実施いたしました。

発掘調査の結果、古墳時代の遺構や県内でも出土例の少ない須恵器、中世の遺構や遺物、近世の溝跡など貴重な資料が見つかっております。

本書は、これらの成果をまとめたものであります。本書が、埋蔵文化財の保護および普及・啓発、学術研究の基礎資料、教育機関の参考資料として広く御活用いただけることを願ってやみません。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県土木部道路建設課、川越土木事務所、新河岸川総合治水事務所、川越市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成10年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、川越市に所在する南久我原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届けに対する指示通知は、以下のとおりである。
南久我原遺跡 (MNMKGHR)
川越市古市場字久我原341-1番地
平成7年5月1日付け教文第2-27号
3. 発掘調査は、県道大宮上福岡所沢線の整備に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については元井茂、浅野晴樹が担当し、平成7年4月1日から平成7年5月31日まで実施した。整理報告書作成事業は小野美代子が担当し、平成9年10月1日から平成9年12月31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量は株式会社東京航業研究所に、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に委託した。
6. 発掘調査時の遺構写真撮影は元井、浅野が行い、遺物の写真撮影は小野が行った。
7. 出土品の整理及び図版の作成は小野が行った。本書の執筆は、1-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、それ以外は小野が行った。
8. 本書の編集は、小野があたった。
9. 本書にかかる資料は平成10年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 遺跡の調査及び本書の作成に当たり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)
新河岸川総合治水事務所、川越市教育委員会

凡例

1. 遺構全体図のX・Y座標による表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位はすべて座標北を表す。
2. 縮尺は全測図を1:400、遺構図を1:60で示し、土師器、須恵器、中世陶器を1:3、1:4、その他の遺物を1:3で示した。例外については挿入図中に示した。
3. 全体図等に記した遺構の略号は以下のとおりである。
SR=古墳跡 SB=掘立柱建物跡 P=柱穴
SK=土壌 SX=整穴状遺構 SD=溝
4. 遺構の名称は原則として調査時の名称を使用した。遺構名称を変更したものは、以下のとおりである。
2号溝→SR1、SD4→SD2
5. 以下の挿入図は、各々の範囲を網掛けて示した。
陶器破片-施釉の範囲

目次

口絵
序
例言
凡例

I 調査の概要	1	(2) 掘立柱建物跡	14
1. 調査に至る経過	1	(3) ビット	14
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	3. 中世・近世	16
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	(1) 概略	16
II 立地と環境	4	(2) 土壌	16
III 遺跡の概要	8	(3) 竪穴状遺構	16
IV 遺構と遺物	9	(4) 溝	17
1. 古墳時代	9	(5) グリッド出土の遺物	19
(1) 概略	9	4. その他の遺物	19
(2) 古墳跡	9	(1) 縄文土器	19
(3) グリッド出土の遺物	13	V 結語	20
2. 平安時代	14	1. 古墳時代の遺構と遺物について	20
(1) 概略	14		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第11図 1号～3号土壌	16
第2図 周辺の遺跡	5	第12図 1号竪穴状遺構	17
第3図 遺跡位置図	7	第13図 1号溝	17
第4図 遺構全体図	8	第14図 2号溝	18
第5図 1号古墳跡	10	第15図 3号溝	18
第6図 1号古墳跡出土遺物(1)	11	第16図 中世の遺物	19
第7図 1号古墳跡出土遺物(2)	12	第17図 近世陶磁器	19
第8図 グリッド出土の遺物	13	第18図 縄文土器	19
第9図 1号掘立柱建物跡	14	第19図 横板集成図	21
第10図 ビット1～ビット15	15		

图版目次

- 图版1 遺跡全景（北東より）
遺跡近景（南東より）
- 图版2 1号古墳跡（東より）
1号古墳跡周溝断面（南側）
- 图版3 1号古墳跡周溝断面（中央）
1号古墳跡周溝遺物出土状況
- 图版4 1号古墳跡遺物出土状況
1号古墳跡横瓶出土状況
- 图版5 1号古墳跡遺物出土状況
- 图版6 1号掘立柱建物跡（西より）
1号土壇（南より）
- 图版7 1号整穴状遺構（北より）
1号溝（東より）
- 图版8 2号溝（東より）
3号溝（北より）
- 图版9 1号古墳跡出土遺物（1）
- 图版10 1号古墳跡出土遺物（2）
- 图版11 土師器
須恵器
- 图版12 中世陶器
近世陶磁器
- 图版13 瓦製瓦石
縄文土器

I 調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県は、多様化する県民の生活圏の拡大に対応し、また高度化する産業活動の円滑化などを図るため、生活環境の保全と道路交通の安全性を重視しながら、体系的な道路網の整備を推進している。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした各種の開発事業に対応すべく、開発部局と事前協議を重ね、文化財保護と開発事業との調整を図っているところである。

県道大宮上福岡所沢線道路事業にかかる埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについては、埼玉県土木部道路建設課長より県教育局生涯学習部文化財保護課長あて、平成5年10月5日付け道建第288号で照会があった。これに対し文化財保護課では、平成5年10月19日に埋蔵文化財の所在確認調査を現地で行い、その結果に基づき、平成5年11月4日付け教文第824-1号「埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて」で、次のとおり回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	南久我原遺跡 (19-338)
種別	集落跡
時代	平安・中世
所在地	川越市古市場字久我原341-1 他

2 取扱いについて

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

その後の協議で、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、平成7年度に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査の実施については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、道路建設課、文化財保護課の三者により協議が行なわれた結果、平成7年4月1日から2ヶ月間の予定で着手することになり、道路建設課において調査に要する経費が予算措置された。

発掘調査に先立ち、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく発掘通知が埼玉県知事から提出され、また、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からは、同法57条第1項の規定に基づく発掘調査届が提出された。

なお、発掘調査届に対する指示通知番号は、次の通りである。

平成7年5月1日付け 教文第2-27号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

平成7年4月1日から5月31日までの2か月間にわたり南久我原遺跡の発掘調査を実施した。

4月上旬 現地に於いて、県土木部道路建設課担当者と当事業団担当者が、調査及び安全対策などについて打ち合わせを行う。調査区が狭く仮設事務所の設置箇所がなかったため、事務所用地は借地することになる。その後、仮設事務所に器材を搬入する。重機による表土の掘削と遺構の確認を開始する。並行して補助員の募集を行う。

4月中旬 17日から補助員を導入し、本格的に遺構の確認調査に入る。表土の掘削終了。調査区は2ヶ所に分かれており、便宜的に北西側をA区、南東側をB区とした。B区からは遺構は検出されなかった。ほぼ平坦な地形で、表土の深さは約50cm～70cmほどになる。基準点測量及び、方眼杭の設置を行う。

4月下旬 引き続き遺構の確認調査を行う。古墳時代の遺物が散布しており、古墳跡らしき遺構も確認される。遺構の実測に入る。

5月上旬 遺構の確認調査と並行して遺構精査に入る。遺物の出土状況及び遺構写真の撮影を行う。遺物の取り上げ及び遺構の実測を行う。

5月中旬 引き続き遺構の精査及び実測を行う。雨が多く配水作業等が多くなる。遺構の精査はほぼ終了する。遺構の全体図を作成する。

5月下旬 全景写真撮影のための清掃を行い、写真撮影終了。記録類をすべて終了する。発掘調査の全行程が終了する。調査区の埋め戻しを行う。器材等を搬出し、現場事務所の撤去作業を行う。

整理作業

平成9年10月1日から平成9年12月31日までの3か月間にわたり、報告書作成のための作業を実施した。

10月 出土遺物の注記・接合作業を行う。これと並行して発掘調査時に作成した図面及び遺構写真の整理を行い、遺構の第二原因の作成に入る。また、遺物の接合及び復元作業と並行して遺物の実測図作成に入る。遺構写真の割り付け終了。

11月 遺構の版組を行い、トレースに取りかかる。遺物の拓本取り終了。土器の復元作業が終了し、遺物の写真撮影を行う。遺物の実測図及びトレースが終了する。遺構図のトレースも終了する。地形図等を作成し、原稿の執筆に入る。報告書の割り付け作業開始。

12月 原稿執筆及び写真図版の作成をする。割付作業をほぼ終了する。巻頭カラー写真の委託撮影を行う。版下の最終チェックをする。原稿執筆終了。入稿する。遺物及び原図、写真ネガ等の記録類の整理を行い、保管場所に移動する。入稿後校正作業を行い、平成10年3月付けて報告書を刊行する。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成7年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	富田 真也
専務理事	吉川 國男
常務理事 兼管理部長	新井 秀直
理事 兼調査部長	小川 良祐

管理部

庶務課長	及川 孝之
主査	市川 有三
主任	長滝 美智子
主事	菊池 久
専門調査員 兼経理課長	関野 栄一
主任	江田 和美
主任	福田 昭美
主任	腰塚 雄二

調査部

調査部副部長	高橋 一夫
調査第四課長	酒井 清治
主査	元井 茂
主査	浅野 晴樹

(2) 整理事業 (平成9年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	富田 真也
専務理事	塩野 博
常務理事 兼管理部長	稲葉 文夫
理事 兼調査部長	梅沢 太久夫

管理部

庶務課長	依田 透
主査	西沢 信行
主任	長滝 美智子
主任	腰塚 雄二
専門調査員 兼経理課長	関野 栄一
主任	江田 和美
主任	福田 昭美
主任	菊池 久

資料部

資料部長	谷井 彪
主幹 兼資料部副部長	小久保 徹
専門調査員 兼資料整理第一課長	坂野 和信
主査	小野 美代子

II 立地と環境

川越市は、武蔵野台地の北端部にあたる川越台地、秩父山地から北東へ延びる入間台地の東端、それに荒川および入間川により形成された広大な荒川低地から成っている。

武蔵野台地は、多摩川により形成された広大な扇状台地であり、川越台地北縁から東京都の板橋区・港区に至るラインはその扇端部にあたる。武蔵野台地は、いくつかの河川により開析されており、複雑な地形を呈している。

新河岸川の水源は狭山市内の武蔵野台地から流れる赤間川にあり、途中、湧水や小河川、柳瀬川や黒目川などと合流しながら川幅を広げ、江戸川に合流する。かつては和光市の東方で入間川（荒川）と合流していた。また、本遺跡の東側を流れる荒川は、埼玉東部の平野部を流れていたが寛永6年（1629年）に河川の改修が行われ、現在の地に移された。同様に、入間川も延宝8年（1680年）に現在の地に移された。入間川の川河道は現在でもよく残っている。

南久我原遺跡は、川越市の中心部から南東へ約5km離れた新河岸川左岸に存在する。新河岸川は、当遺跡

の北西部で不老川と合流し、遺跡の西側を巡りながら南東方向に流れている。

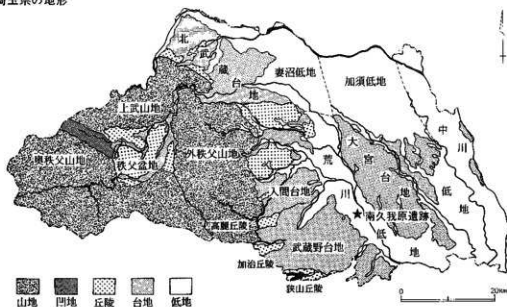
本遺跡は、旧入間川が形成した自然堤防上にあり、新河岸川より100mほど東に入った地点にあたる。粘土質の水成土壌が広く堆積しており、現地表面の標高は、約9mになる。遺構は、地表下約50cm～70cmで確認でき、現地形はほぼ平坦になっている。この周辺は、江戸時代からの新河岸川の水上交通の発達と商業の発展による商家の町並みが形成された地域であるため、遺跡内では、建造物などによる土層の攪乱が顕著にみられた。今回の調査では古墳の周溝や中世の掘立柱建物跡、近世の溝跡などが見つかった。

南久我原遺跡の立地する新河岸川左岸は遺跡が少なく、本遺跡の北方約1kmには、中世の荘園遺跡である〔古尾谷荘〕に関連する遺跡と考えられる西河原遺跡（2）が存在するのみである。

これに反して、新河岸川右岸にあたる武蔵野台地縁辺部（上福岡市域）では旧石器時代以来、各時代の遺跡の所在が知られている。

武蔵野台地縁辺部の旧石器時代の遺跡は、ナイフ形

第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡



- 1 南久我原遺跡 2 西河原遺跡(以上川越市) 3 ハケ遺跡 4 宅地跡貝塚 5 川崎貝塚 6 川崎遺跡
 7 川崎横穴(以上福岡市) 8 寺尾貝塚 9 後原・寺側遺跡 10 中原遺跡(以上川越市) 11 北野遺跡
 12 上福岡貝塚・梅現山遺跡 13 滝遺跡 14 丸橋遺跡 15 兵宮遺跡 16 城山遺跡 17 Na.34遺跡
 18 伊佐島遺跡 19 鷺森遺跡(以上福岡市) 20 宮領遺跡 21 上内手遺跡(以上富士見市)

石器を出した川崎遺跡(6)などが知られている。

縄文時代の遺跡としては、縹糸紋土器を出した滝遺跡(13)などが知られている。また、ハケ遺跡からは隆起線文土器も見つかっている。しかし、初期の遺跡の確認数はわずかである。早期後半から前期にかけては、寺尾貝塚(8)や川崎貝塚(5)、宅地添貝塚(4)、学史上有名な上福岡貝塚(12)など早期末から前期にかけての海進現象に伴って営まれた貝塚が多く見られる。これらは、いずれも武蔵野段丘面に立地しているが、一段低い立川段丘面からも長宮遺跡(15)、鷺森遺跡(19)、宮廻遺跡(20)などの貝塚を伴わない同時期の遺跡が見つかっている。また、南久我原遺跡のほぼ西方にあたる新河岸川の右岸には、縄文時代中期の集落跡を主体とするハケ遺跡(3)が存在する。他には、滝遺跡などからも中期初頭の遺物が出土している。また、北野遺跡(11)からも縄文時代中期の土器片が収集されている。なお、縄文時代の後・晩期には特筆すべき遺跡は見当たらない。

弥生時代にも、武蔵野台地の北端部周辺には遺跡が見られず、この時期の空白地帯となっている。

古墳時代以降の遺跡としては、五領期の住居跡を数件出土した上福岡貝塚(12)、また、上福岡貝塚と接する権現山遺跡(12)などが知られている。権現山遺跡は35m級の前方後方形周溝墓を主墳とする9基の周溝墓群が出土したことで知られる。他に、五領期・鬼高期の住居跡および奈良・平安時代の住居跡も検出されている。滝遺跡(13)は、武蔵野・立川両断丘面にまたがる広範囲の遺跡で、8次にわたる調査が行われている。その結果、権現山周溝墓群と同時期の住居跡を主体として、鬼高期や奈良時代の住居跡などが検出されている。丸橋遺跡(14)は、立川段丘上に立地する遺跡で、五領期と鬼高期の住居跡が検出されている。長宮遺跡(15)も立川段丘上に立地する遺跡であるが、

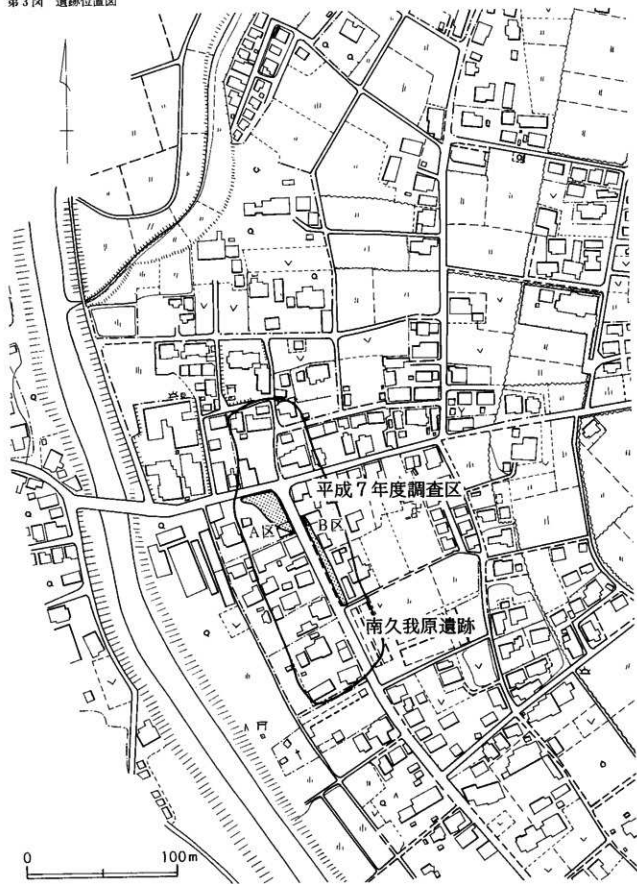
17次にわたる調査の結果、古墳時代後期鬼高期の住居跡が検出されている。また、中世から近世にかけての溝跡、井戸跡、土壇、ピット群などが遺跡の中心を占めている。また、同じ立川段丘面に立地する宮廻遺跡からは、平安時代の住居跡も見つかっている。南久我原遺跡の西方約700mの所には、川崎横穴群が存在し、3基の横穴墓が調査されている。

南久我原遺跡より南東に約1.6kmの新河岸川右岸の自然堤防上には伊佐島遺跡(18)が存在する。二次にわたる調査で伊佐島遺跡からは弥生時代後期の環溝跡、平安時代の住居跡、中世の遺構などが検出されている。このすぐ東側、新河岸川の左岸には上内手遺跡(21)が存在する。上内手遺跡からは古墳時代前期および平安時代の住居跡が検出されている。新河岸川の左岸には他に富士見市No.34遺跡(17)や城山遺跡(16)などが見られる。富士見市No.34遺跡は、古墳時代及び平安時代の遺跡と考えられる。城山遺跡は、中世の城跡である。

南久我原遺跡からは、方墳の周溝と考えられる遺構が検出されており、この周溝の最下層からは古墳時代前期の器が、中層からは横瓶が出土している。また、周溝の覆土中からは古墳時代中頃以降の土師器も出土している。さらに、平安時代のもと考えられる孤立柱建物跡も検出されている。

ここで、当遺跡の周辺に目を転じると上福岡貝塚や権現山遺跡、滝遺跡、丸橋遺跡、長宮遺跡など武蔵野段丘面から立川段丘面にかけて分布する同時期の遺跡が多いことがわかる。また、多少距離は離れるが伊佐島遺跡や上内手遺跡など弥生時代後半から古墳時代前期、さらには平安時代の遺構が検出される遺跡も多く、南久我原遺跡がこれらの遺跡との関連のもとに営まれた遺跡である可能性を指摘できよう。

第3図 遺跡位置図



III 遺跡の概要

南久我原遺跡の調査は今回が初めてである。国道254号線から西側に延びる県道がほぼ90度方向に南下するカーブの西側交差点部分および道路の東側の拡幅に伴うもので、調査面積は、約500m²である。ちょうど道路を挟んで遺跡の中心部を調査した。調査に際し、便宜的に県道西側の交差点部分をA区、県道の東側の部分をB区とした(第3図参照)。A区からは各種の遺構が検出され、遺物も出土したが、B区からは遺構等の検出はなかった。

遺跡の周辺は、起伏が少なく平坦な地形になっており、新河岸川に向かって、緩やかに傾斜している。表土の深さは約50cm～70cmと西側がやや深くなる。遺跡

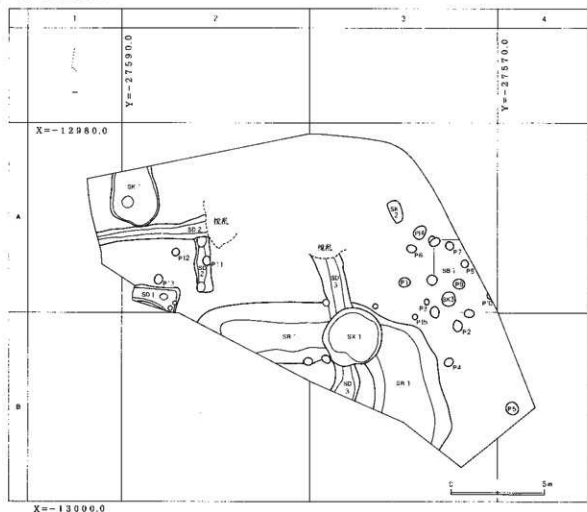
の標高は約9mである。

調査の結果、古墳の周溝1基、平安時代の掘立柱建物跡1棟、近世の竪穴状遺構、溝などが検出された。

古墳の周溝の最下層からは、古墳時代前期の器台、中層からは、古墳時代後期の横取が出土している。また、覆土中からは古墳時代中頃の壺や甕が出土している。他の遺物としては、須恵器の破片、中世陶器や近世陶器の破片が目につく。また、中世陶器の破片を利用した砥石も出土している。

遺構・遺物も出土は多くなかったが、武蔵野段丘面から荒川低地への移り際にある貴重な遺跡といえよう。

第4図 遺構全体図



IV 遺構と遺物

1. 古墳時代

(1) 概略

古墳時代の遺構は、方墳の周溝と思われるものが1基検出された。周溝は、調査区(A区)南側の中心部より検出され、古墳跡の約三分の二以上は調査区外に残ったため、主体部は確認できなかった。周溝の覆土中からは土師器や須恵器が出土しているが、時期的には、古墳時代前期から後期のものまでばらつきがみられる。遺物の出土量は少ない。

遺構外出土の遺物もわずかである。

(2) 古墳跡

第1号古墳跡(第5図 図版2～5)

1号古墳跡はA区の南寄り、B-2・3グリッドより検出された。調査により確認されたのは、周溝の一部で、その南側の約三分の二以上は、調査区外に残ってしまった。このため主体部は確認できず、墳形も判然とはしなかったが、調査部分の形状から方墳であろうと思われる。周溝は、近世の竪穴状遺構(SX-1)と溝(SD-3)により、周溝内側の東側コーナー付近が覆されている。また、この1号竪穴状遺構と重複する部分より東側、特に上層断面B-B'付近は、長いあいだ地下水に浸っていたためグライ層(註1)化が進み、断面形が変形している。このためB-B'付近の溝底の幅および立ち上がりは、本来の形よりかなり広がっていると考えられる。

周溝は、北側部分がほぼ完全に検出され、北辺は東西南北方向にほぼ並行に掘削されている。この状況から古墳の主軸は南北方向に築かれていたと考えられる。

周溝の規模は、検出された部分のコーナーからコーナーまでが約12mであり、外周がおそらく12m-13m規模の方墳であったと考えられる。周溝の上幅は北辺のA-A'付近で約3.2m、東側部分で約3.5mになる。遺構確認面からの深さは、最深部で約1mになる。周溝の立ち上がりは、内側が若干なだらかになっている。

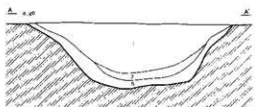
遺物の出土量は多くなかったが、覆土の最下層からは古墳時代前期の器台等が出土している。また、北西コーナー寄りの中層からは横頸が出土している(図版4)。他にも覆土中から古墳時代中頃の土師器等が出土している。

註1 水田上層や地下水面の高い上層の断面に見られる青みをおびた層。土壌が還元状態になり、三種の鉄が二価に還元されるために起こる。ウクライナ語に由来する。

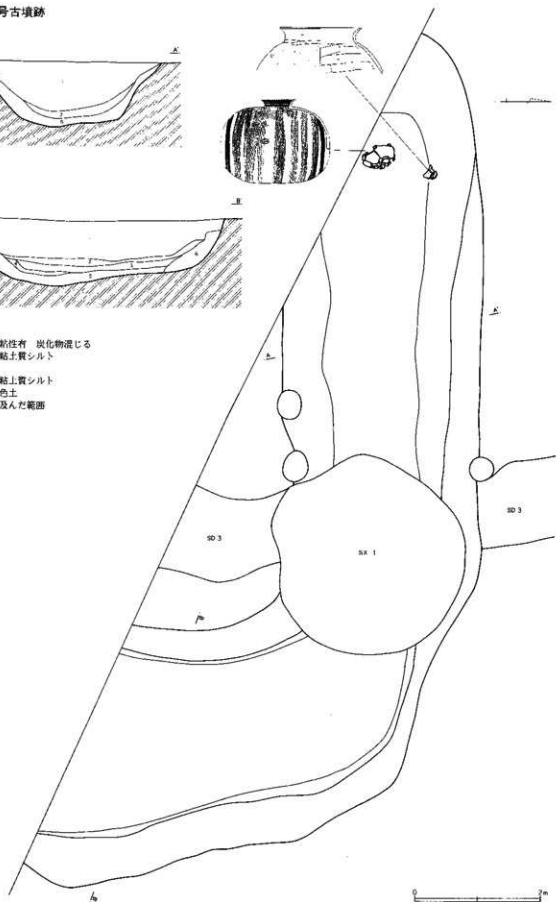
第1号古墳出土遺物(第6図・7図 図版9・10)

第6図-1は高坏である。坏の口唇部と脚部の下端を欠く。大宛頸い土器で、坏部の約4分の3と脚部の約3分の1を欠く。現存高は約8cmである。脚部に3孔を有する。表面の風化が激しく整形痕は不明瞭であるが、坏底部には篋割りが、脚部には篋跡が観察できる。坏の内面は撫で、脚部内面は篋撫でが施される。明褐色を呈する。2は器台の脚部である。裾部の大半を欠く。底部の推定径は約10cm、現存高は約6.2cmである。脚部に3孔を有する。外面は篋磨き、内面は篋撫でが施される。明褐色を呈する。3は高坏の坏部である。坏部の約3分の2を欠く。推定口径は約23.4cm、現存高は約6.4cmである。内外面とも刷毛目調整され、部分的に篋磨きが施される。黄褐色を呈する。4は台付甕の口縁部である。口縁の約4分の3を欠く。推定口径は約12.4cm、現存高は約1.7cmである。内外面とも横撫でが施される。赤褐色を呈する。5は甕の口縁部である。口縁の約3分の2を欠く。推定口径は約21.6cm、現存高は約4.2cmである。内外面とも刷毛目調整され、外面は部分的に撫でが施される。橙褐色を呈する。6・9・10は甕の底部である。6の底径は約4.2cm、現存高は約1.9cmである。内面は撫で、外面は刷毛目調整が施される。橙褐色を呈する。9の推定径は約7cm、現存高は約2.5cmである。内面は小口状工具による撫

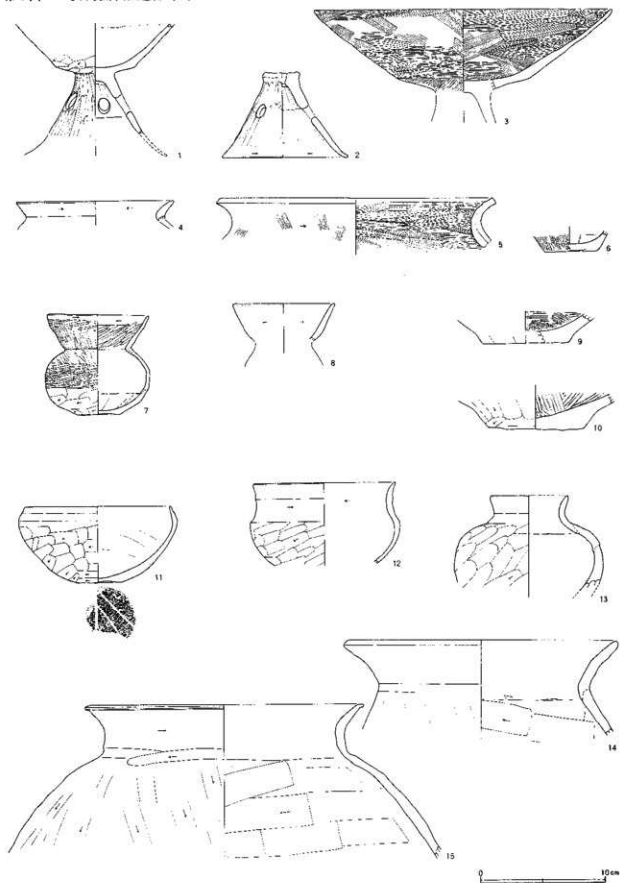
第5図 1号古墳跡



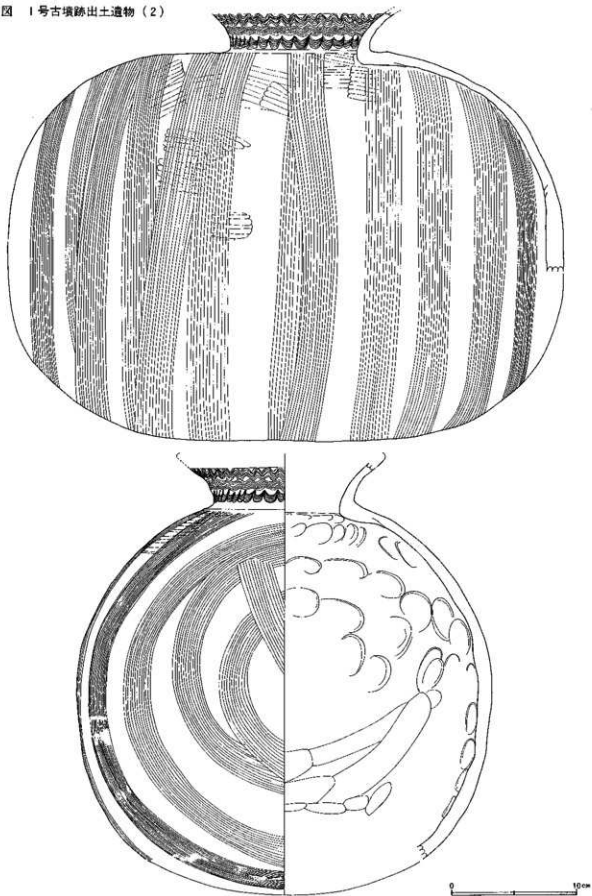
- 1 黒色土 粘性有 炭化物混じる
- 2 黒褐色土 粘土質シルト
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土 粘土質シルト
- 5 にぶい黄褐色土
- 6 グライ化の及んだ範囲



第6图 1号古墳跡出土遺物(1)



第7图 1号古墳跡出土遺物(2)



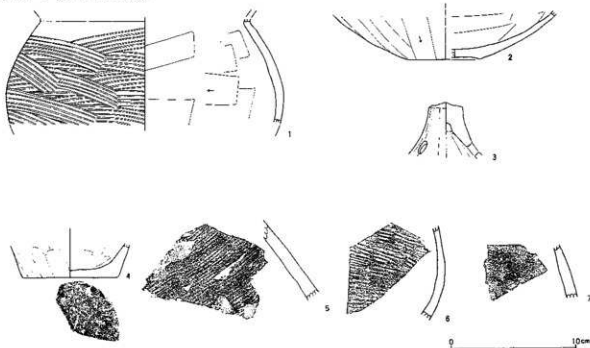
で、外面は篋削りが施される。橙褐色を呈する。10の推定径は約7.8cm、現存高は約2.8cmである。内面は小口状工具による撫で、外面は篋削りが施される。橙褐色を呈する。7・8は小型壺である。7は口縁部と胴部の約2分の1を欠く。推定口径は約7.7cm、底部径は約3cm、器高は約8.1cmである。口縁部は内外面とも磨きか施された後、口唇部を横撫で。胴部は外面が磨きと篋削り、内面は撫でが施されている。淡い黄褐色を呈する。8は口縁部だけの破片で、焼成時に歪みが生じたものである。口縁部には横撫での痕が観察できる。明褐色を呈する。11は埴である。約2分の1を欠く。口径は約11.8cm、底部径は約3.5cm、器高は約6cmである。外面は篋削り、内面は撫で。口唇部は横撫で。底部には木葉痕が残る。外面は赤色塗彩有。地色は淡い褐色を呈する。12は坏である。約4分の3を欠く。推定口径は約11.2cm、現存高は約6.4cmになる。外面は篋削り、内面は撫で。口縁部は横撫で。表面の風化が激しい。赤褐色を呈する。13は小型の壺である。約3分の2を欠く。口径は約6.1cm、現存高は約6.8cmになる。外面は篋削り、内面は撫で。口縁部は横撫で。橙褐色を呈する。14は壺の口縁である。約4分の3を欠く。口径は約21.2cm、現存高は約6.9cmである。外面

は篋削り、内面は撫で。口縁部は横撫で。淡い褐色を呈する。15は甕である。約3分の2を欠く。口径は約21.3cm、現存高は約12cmである。外面は篋削りの後撫で、内面は撫で。口縁部は横撫で。橙褐色を呈する。第7図は横瓶である。約2分の1を欠く。口唇部が残っていないが、口径は約16cm-17cmになると思われる。長径44.3cm、短径33.1cm、現存高は約33.7cmである。外面は叩きの後カキメ、内面は叩きて整形される。口縁部には波状文が施される。灰褐色を呈する。焼成は悪く、表面の風化が激しい。

(3) グリッド出土の遺物

土師器・須恵器 (第8図 図版11)

1は甕の胴部である。約4分の3を欠く。最大径は約22.2cm、現存高は約8.9cm。外面は刷毛目、内面は撫で。橙褐色を呈す。2は甕の底部である。底径は約5.7cm、現存高は約3.5cm。淡い褐色を呈す。3は高環の脚部である。現存高は約5.2cm。三孔を有す。橙褐色を呈す。4は甕の底部である。底径は約7.5cm、現存高は約2.7cmである。橙褐色を呈す。5-7は須恵器の破片である。5は大甕の破片。灰黄色を呈する。6・7は壺の破片と思われる。灰緑色で自然釉がかかる。



2. 平安時代

(1) 概略

平安時代の遺構は、掘立柱建物跡が1棟検出されている。調査区際からの検出であり、柱穴は4本確認されている。この他に、掘立柱建物跡の周辺および2号溝の周辺からピットが数基検出されている。

遺物の出土は、ほとんど無く、坏の小破片が数点出土しているのみである。

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (第9図 図版6)

1号掘立柱建物跡はA区の東寄り、A-3グリッド、1号古墳跡の北東側より検出された。調査区際よりの検出であるため、柱穴は4本しか確認できなかった。しかし、この4本の柱穴の配置から2間2間の建物跡になると考えられる。建物跡の軸は、ほぼ南北方向になる。P1の中心からP3の中心までの距離は3.75m

である。確認面からの深さはP1で約0.50m、P3で約0.46mになる。柱根はみられなかった。

(3) ピット

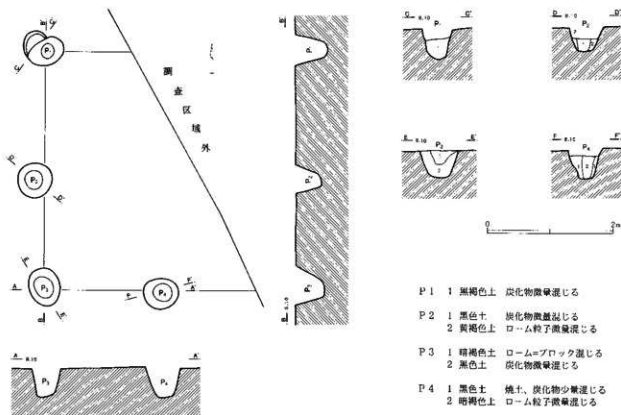
Pit 1~10・14・15 (第10図)

Pit 1~10・14・15は、P5 (B-4グリッド) を除き、いずれもA-3、B-3グリッドから検出された。いずれも、規模はまちまちであり、並びも持たない。P4・P5をのぞき、1号掘立柱建物跡の周辺から検出されており、覆土の状況が似通っているため、同様の時期のものと思われる。

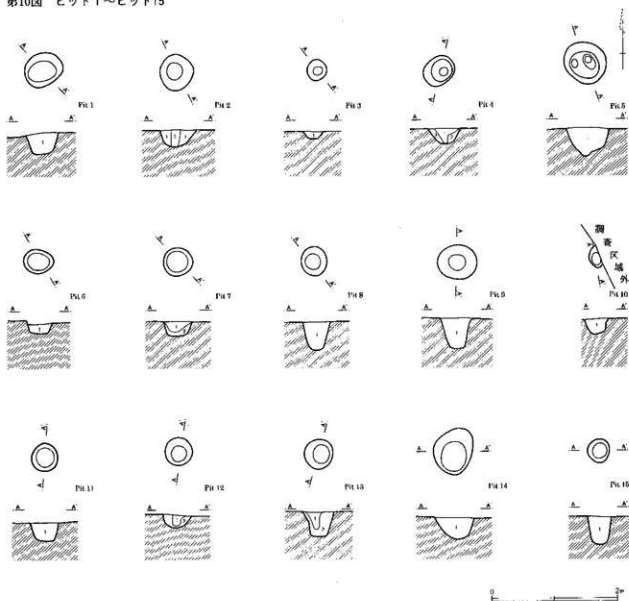
Pit 11~13 (第10図)

Pit 11・12・13は、A-2グリッドから検出された。P11は、2号溝により壊されている。いずれも小ピットである。3基ともローム=ブロックが混入している。他のピットとの直接の関連は無いと考えられる。

第9図 1号掘立柱建物跡



第10図 ビット1～ビット15



※ 断面図の標高は、すべて8.10 m

Pit 1

1 暗黄褐色土 粒子密

Pit 2

1 暗黄褐色土 締まりよし
2 黒色土 炭化物多し

Pit 3

1 黒褐色土 焼上・炭化物多し
締まりよし

Pit 4

1 黒色土 炭化物少量混じる
2 暗黄色土

Pit 5

1 黒色土 黄色土のブロック混じる
締まりよし

Pit 6

1 暗黄褐色土 粘性有 締まりよし

Pit 7

1 暗褐色土 炭化物微量混じる
締まりよし
2 暗黄色土 粘性有 若干砂が混じる

Pit 8

1 黒褐色土 粘性有 黄色土混じる

Pit 9

1 黒褐色土 黄色土混じる

Pit 10

1 灰褐色土 黄色土混じる
炭化物微量混じる

Pit 11

1 暗褐色土 ローム=ブロック混じる

Pit 12

1 褐色土 黄色土混じる
2 暗黄色土 ローム=ブロック混じる

Pit 13

1 黒褐色土 粘性有 黄色土混じる
2 暗黄褐色土 ローム=ブロック混じる

Pit 14

1 黒褐色土 黄色土混じる

Pit 15

1 黒褐色土 黄色土混じる

3. 中世・近世

(1) 概略

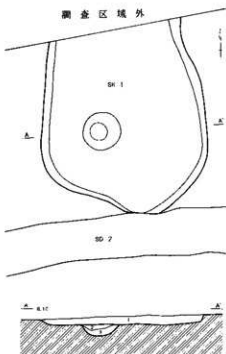
中・近世の遺構は、土壇3基、竪穴状遺構1基、他に溝3条が検出されている。1号土壇は、2号溝に壊されているため、中世のものとも考えられるが、出土遺物も無く、明言できない。また、2号土壇も形状からは中世のものとも考えられるが、1号土壇同様決め手に欠ける。このため、中世および近世をまとめて報告したい。

遺物は、遺構に伴うものはほとんど出土していない。遺構外からは、中世陶器および近世陶器の破片などが、数点出土している。他には瓦を再利用した礫石などがみられる。

(2) 土壇

1号土壇 (第11図 図版6)

1号土壇はA-1・2グリッドより検出された。南北方向に長軸を持つ不定楕円形の上壇であると思われるが、南側の先端部は2号溝に壊されており、北側は調査区外に残る。南西寄り小さいピットを持つ。短軸で約2.62m、深さは約15cmになる。遺物の出土は無



- SK 1
 1 褐色土 砂りよし
 2 黒褐色土 砂りよし
 炭化物混じる
 3 暗褐色土 炭土粒子多し
 炭化物少量混じる

かった。

2号土壇 (第11図)

2号土壇はA-3グリッドより検出された。北西方向に長軸を持つ楕円形の土壇である。長軸で約1.31m、短軸で約0.66m、深さは約18.5cmになる。遺物の出土は無かった。

3号土壇 (第11図)

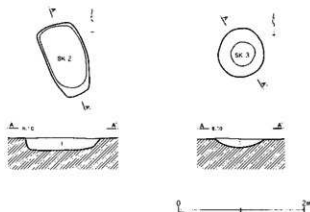
3号土壇はA-3グリッドより検出された。ほぼ円形の上壇で、皿状に立ち上がる。径は約0.78m、深さは約13.2cmになる。遺物の出土は無かった。

(3) 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構 (第12図 図版7)

1号竪穴状遺構はB-3グリッドより検出された。1号古墳跡および3号溝を壊している。不定円形を呈している。径は約3.0m~3.13m、深さは約1.38mになる。覆土の状態は不明である。また、底部の形も不定形であり、性格等は不明である。

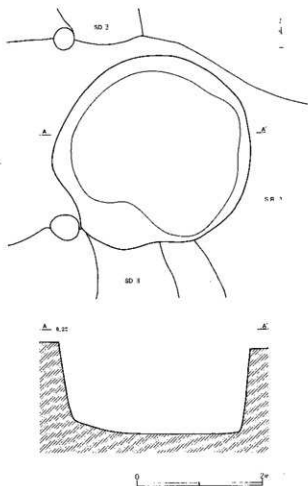
覆土中より近世の焙烙の破片が出土しているほか、遺物の出土は無かった。



- SK 2
 1 暗褐色土 粘り性 砂りよし
 炭土粒子、炭化物多し

- SK 3
 1 暗褐色土 ロームブロック混じる
 炭化物多量に混じる

第12図 1号竪穴状遺構



(4) 溝

1号溝 (第13図 図版7)

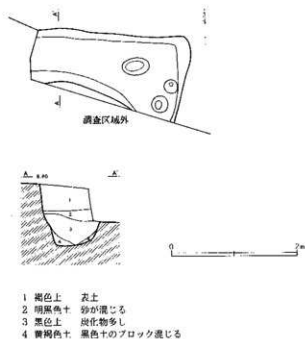
1号溝はA-2グリッドの南西隅の調査区際より検出された。ちょうど東西方向に走る溝が南下するコーナーの部分にかかっている。溝幅は、約0.85m-0.92mになる。深さは、地表面からは約0.94m、確認面からは約0.35mになる。溝底は平らで、コーナー付近からは3個の小ピットが検出されている。

覆土中より上師器や中世陶器の小破片が出土しているが、流れ込みと考えられる。遺構に伴う遺物の出土は無かった。

2号溝 (第14図 図版8)

2号溝はA-1・2グリッドより検出された。1号溝の北側を走る。東西方向に走る部分と南北方向にはしる部分から構成される。ちょうど、東西に走る溝と

第13図 1号溝

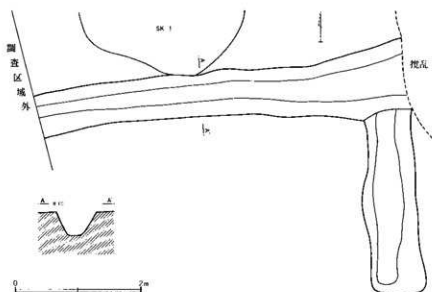


- 1 黒色土 赤土
- 2 明黒色土 砂が混じる
- 3 紫色土 炭化物多し
- 4 黄褐色土 黒色土のブロック混じる

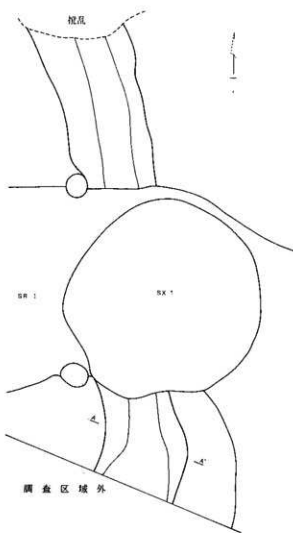
南北に走る溝が交わる地点で、東西方向の溝の先端が後世の攪乱とぶつかる。その後、攪乱が弱いため、溝が延びる方向は判然としないうが、全体図を見ると、東西方向の2号溝はそのまま東進して、攪乱内で方向を変え、3号溝に繋がる可能性が強いと考えられる。南北方向に走る溝とは多少の時期差があると考えた方が妥当であろう。南北方向の溝は、1号古墳跡のすぐ北側で止まる。溝幅は、東西部分で約0.85m前後、南北部分で約0.90m前後と、大して差は無い。深さは、東西溝が確認面から約0.36m、南北溝が確認面から約0.33mと、これも大差は無い。溝底は平らである。南北溝の南側先端部と東西溝と交わる部分には小ピットが存在する。

覆土中からは中世陶器や近世陶器の小破片が数点出土している。遺構に伴う遺物の出土は無かった。

第14図 2号溝



第15図 3号溝



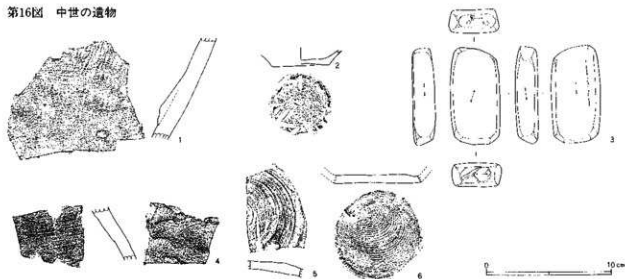
- 1 黒色土 ローム=ブロック混じる
- 2 明褐色土 ローム=ブロック混じる
- 3 黒褐色土 ローム粒子混じる
- 4 黄褐色土 ローム=ブロック多し

3号溝 (第15図 図版8)

3号溝はA・B-3グリッドより検出された。南北に走る溝である。1号古墳跡を壊し、1号竪穴状遺構に壊される。東西方向に走る部分と南北方向にはる部分から構成される。北側は後世の擾乱で壊され、南側は調査区外に延びる。2号溝の記述の際にも触れたが、北側は、東進する2号溝と擾乱内で繋がる可能性が強いと考えられる。溝幅は、約1.26~1.32m前後である。深さは、約0.45~0.50mになる。溝底は、やや平らであるが、立ち上がりは湾曲しており、2号溝とは異なる。

覆土中からは中世陶器や近世陶器の小破片が数点出土している。遺構に伴う遺物の出土は無かった。

第16図 中世の遺物



(5) グリッド出土の遺物

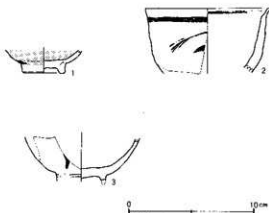
中世の遺物 (第16図 図版12・13)

第16図-1・4は甕の破片である。4の内面には叩き目が残る。1は灰色、4は淡い灰色を呈する。2は坯の底部である。底径は約4.5cmで、底部には糸切りの痕が残る。橙褐色を呈す、いわゆる赤焼きの須臾器である。6は坯の底部で、糸切り痕が残る。色調は灰色を呈する。5は蓋である。摘みの部分は剥落している。色調は灰色を呈する。3は砥石である。当時の瓦片を再利用したもので、破片の間隔は1mmに磨かれている。また、周囲ほどではないが、本米の瓦の表面も砥石として利用されている。写真図版に見られる傷痕は調査時のものである。色調は黒っぽい灰色を呈している。

近世陶磁器 (第17図 図版12)

第17図-1は小型の壺である。胎土は乳白色で、薄い緑がかかった釉がかかっている。高台径は約3.4cmである。2は鉄絵付けの壺である。口径は約9.8cmである。焼成温度に問題があったようで、釉が小さな泡状になっている。3は磁器である。器種は壺である。高台の下端が壊れているが、径は3.8cm位であったと思われる。いずれも近世末のものと考えられる。

第17図 近世陶磁器



4. その他の遺物

(1) 縄文土器 (第18図 図版13)

2号溝の覆土中から縄文土器が1点出土している。表面の風化が激しいが、LRの縄文が施されているのが観察できる。後期前葉のものと考えられる。

第18図 縄文土器



V 結語

1. 古墳時代の遺構と遺物について

今回の調査では、古墳時代から平安時代、中世・近世の各遺構や遺物が検出されたが、1号古墳跡以外からは掘った遺物の出土は見られなかった。したがって、ここでは、1号古墳跡とその周溝より出土した遺物についてまとめておきたい。

1号古墳跡としたものは、方形のプランを持つ周溝の一部分が検出されている。規模は、外周の一辺が約12m～13m、溝の上幅が約3.2m～3.5m、遺構確認面からの深さが最深部で約1m程である。遺構の大半は調査区外に残ったため、主体部等は確認できず、周溝の一部分だけが検出された。遺跡の周辺は、現在市街地になっており、現地地形から遺構の状況を推し量ることは不可能である。

周溝からは、約20点を越える遺物が出土しているが、第6図・第7図に示したものの以外は図示できなかった。周溝の下層からは、古墳時代前期の高環(第6図1)、覆土の上層からは、古墳時代後期の土師甕(第6図15)や横瓶(第7図)などが出土している。覆土中からは、他にも古墳時代後半の土師器が数点出土している。

この周溝の性格をどのようなものとして捉えるかは、意見の分かれるところであるが、その規模から古墳時代前期の方形周溝墓の一部とは考え難い。

ところで、第6図15の甕と第7図の横瓶は、遺構確認面から深さ約20cmの覆土中から出土しており、これらの土器が埋まった時点で、溝は完全に埋まりきっていなかったことがわかる。また、この2点の土器は、同一層内から80cmほどの距離で出土しており、ほぼ同時に埋まったものと考えて差し支えないであろう。さらに、他にも古墳時代前期末から後期にかけての遺物が覆土中より出土しており、七世紀後半の段階では、溝の形状が残っていたと考えられる。

以上の点からこの周溝は、七世紀後半に掘削されたものとするのが妥当であろう。したがって、古墳時代前期に属する遺物は、周溝が掘られた直後に落ち

込んだものと考えたい。

周溝の性格については不明確な点が多い。出土遺物も特徴的なものは無く、遺物による性格づけも困難である。また、調査面積がわずかであるため、周囲の状況から推し量ることも不可能である。したがって、現時点では調査時の見解に従いが、方墳の周溝である可能性を指摘するにだけにとどめておきたい。

次に出土遺物についてまとめておきたい。

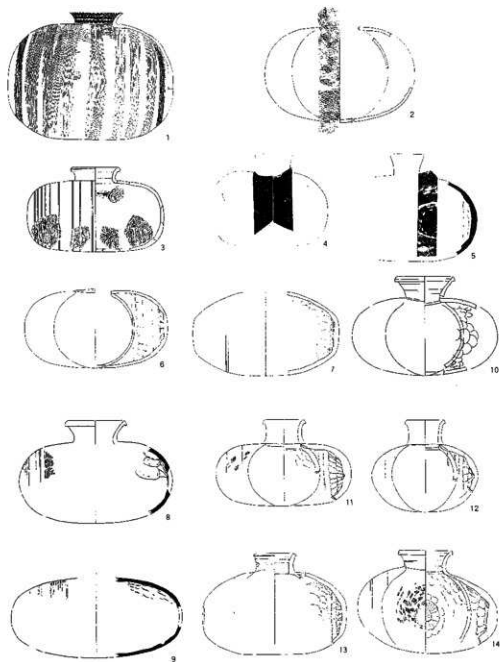
1号古墳跡の周溝から出土した土師器は、おおまかに5世紀前半(第6図1～6)、5世紀後半(第6図7・8)、6世紀前半(第6図11・12)、7世紀後半(第6図14・15)の四段階に分かれると考えられる。このうち第6図15の甕が、覆土上層から出土していることで、古墳の下限を決めることが可能になる。さらに、この甕と共存する状態で出土した第7図の横瓶にも、同様の年代を与えることができ、この横瓶が8世紀代まで下ることはないと考える。

第19図は、県内出土の横瓶を集めたものであるが、各報告者により与えられた年代を参考にすると、東松山市久保原古墳出土例と江南町塩新田24号墳出土例以外は8世紀代の横瓶であり、古墳時代に属する横瓶の出土がいかに少ないものであるかが窺える。

さて、当遺跡の横瓶の年代に関してであるが、県内の出土例から判断すると、渡辺一氏が嶋山I期とした(渡辺1990)第19図10よりも古い様相を示すと考えられる。長さに対する器高の割合が大きい点、カキメがしっかり残っている点、口縁部に波状文が残っている点などから7世紀代のものと考えて差し支えないと思われる。ちなみに塩新田24号墳の年代は、6世紀末から7世紀初頭と考えられており、この例も7世紀初頭のものと考えられる。

横瓶の産地は、おそらく県内の窯であると考えられるが、現時点では具体的な窯跡は確認できていない。

第19図 埼玉県出土の横瓶



1 南久我原遺跡 2 東松山市久保原古墳 3 江津町塩新田遺跡
4・5 嵐田市荒川附遺跡 6・7 東松山市山下後遺跡 8~14 鹿川古墳群

1~7・10~14 (同半縮尺)
8・9 (縮尺不同)

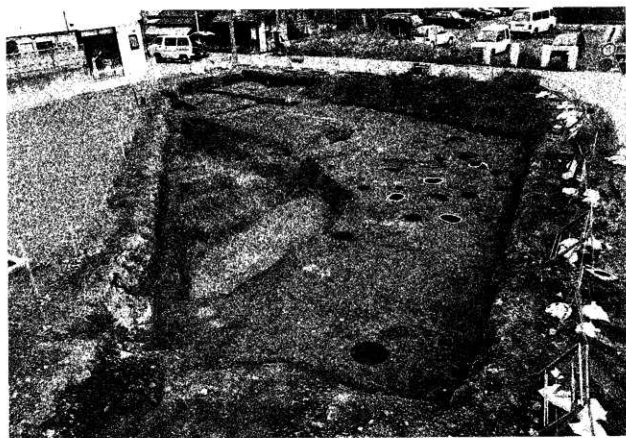
引用・参考文献

- 上福岡市教育委員会 1975 『川崎遺跡第1次調査概報』
- 上福岡市教育委員会 1976 『川崎遺跡第2次調査概報』
- 上福岡市教育委員会 1978 『川崎遺跡(第3次)・長宮遺跡』 郷土資料第21集
- 上福岡市教育委員会 1979 『埋蔵文化財の調査(I)』 郷土資料第22集
- 上福岡市教育委員会 1980 『埋蔵文化財の調査(II)』 郷土資料第24集
- 上福岡市教育委員会 1981 『埋蔵文化財の調査(III)』 郷土資料第26集
- 上福岡市教育委員会 1982 『埋蔵文化財の調査(IV)』 郷土資料第28集
- 上福岡市教育委員会 1984 『埋蔵文化財の調査(VI)』 郷土資料第30集
- 上福岡市教育委員会 1986 『埋蔵文化財の調査(VIII)』 郷土資料第32集
- 上福岡市教育委員会 1987 『竊竊遺跡の調査—縄文時代前期の集落跡の調査—』 郷土資料第33集
- 上福岡市教育委員会 1987 『埋蔵文化財の調査(IX)』 郷土資料第34集
- 上福岡市教育委員会 1989 『埋蔵文化財の調査(III)』 郷土資料第37集
- 上福岡市教育委員会 1990 『埋蔵文化財の調査(II)』 郷土資料第39集
- 上福岡市教育委員会 1991 『埋蔵文化財の調査(III)』 郷土資料第41集
- 上福岡市教育委員会 1992 『埋蔵文化財の調査(IV)』 郷土資料第43集
- 上福岡市教育委員会 1993 『埋蔵文化財の調査(V)』 郷土資料第44集
- 上福岡市教育委員会 1994 『埋蔵文化財の調査(VI)』 郷土資料第45集
- 上福岡市教育委員会 1995 『埋蔵文化財の調査(VII)』 郷土資料第46集
- 上福岡市教育委員会 1996 『埋蔵文化財の調査(VIII)』 郷土資料第47集
- 上福岡市ハケ遺跡調査会 1979 『ハケ遺跡C地区』
- 上福岡市遺跡調査会 1982 『長宮遺跡第8次の調査』 上福岡市遺跡調査会報告書第1集
- 上福岡市遺跡調査会 1997 『伊佐島遺跡第2次の調査』・弥生時代後半の扇塚跡の調査— 上福岡市遺跡調査会報告書第4集
- 川越市遺跡調査会 1993 『西河原遺跡』—第1次調査— 川越市遺跡調査会報告書第15集
- 江南町史編さん委員会 1995 『江南町史』—資料編1 考古— 江南町
- 酒井清治・伊森博幸他 1995 『須恵器集成図録(空跡編)第4巻』—東日本編II— 雄山閣出版
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983 『後張—本文編II—』—関越自動車道線関係埋蔵文化財発掘調査報告—XV— 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 『山王裏・中原遺跡』—一般国道254号線関係埋蔵文化財発掘調査報告— 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第98集
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992 『荒川附遺跡』—国道122号線バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告—V— 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第112集
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992 『伊佐島遺跡』—県道東大久保大井線関係埋蔵文化財発掘調査報告— 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第116集
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995 『上内子遺跡』—県道東大久保大井線関係埋蔵文化財発掘調査報告— 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第160集
- 富士見市遺跡調査会 1980 『宮廻遺跡』 富士見市遺跡調査報告第10集
- 宮下知良 1984 『須恵器類型について』『日本古代文化研究 創刊号』 RHALANX—古墳文化研究会—
- 渡辺 一 他 1990 『埼玉県北企部鳩山窯跡群II』鳩山窯跡群発掘調査報告書第2冊—空跡編(2)— 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

写真図版



遺跡全景（北東より）



遺跡近景（南東より）



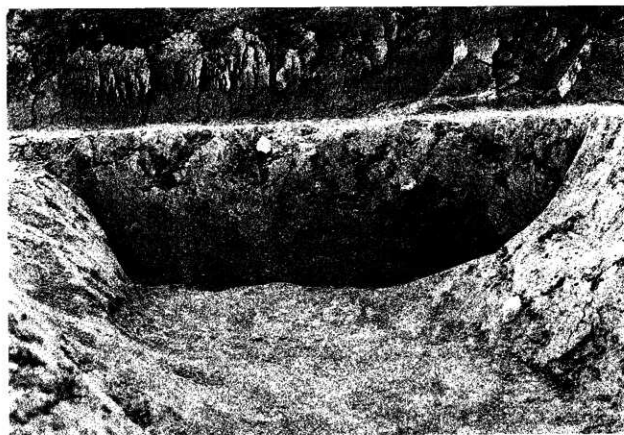
1号古墳跡 (東より)



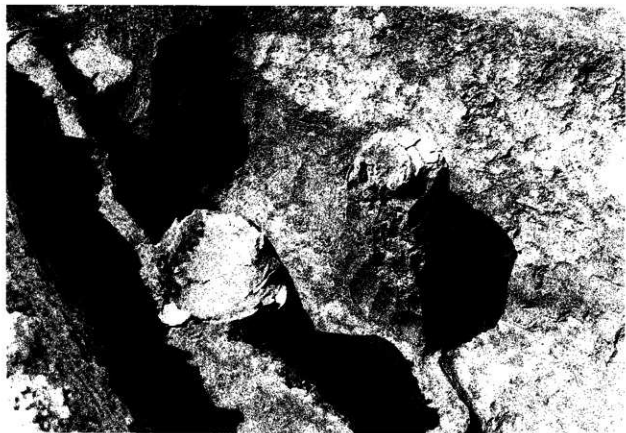
1号古墳跡周溝断面 (B-B')



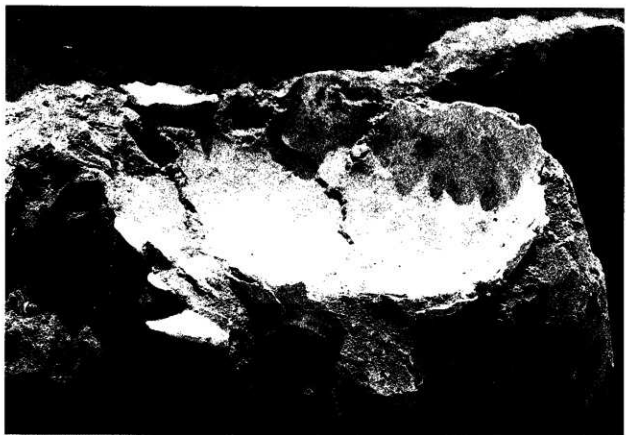
1号古墳跡周溝断面 (A-A')



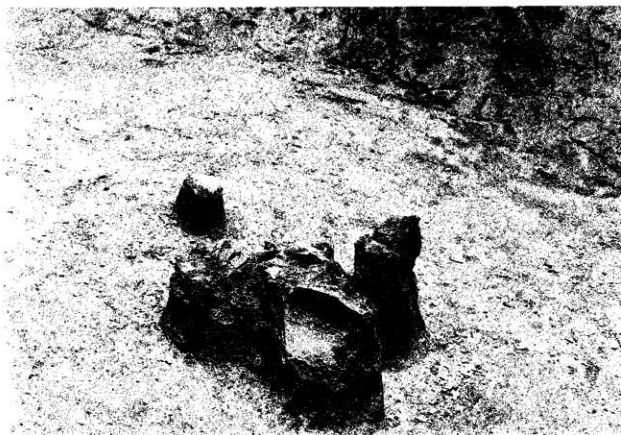
1号古墳跡周溝遺物出土状況



1号古墳跡遺物出土状況



1号古墳跡横瓶出土状況



1号古墳跡遺物出土状況



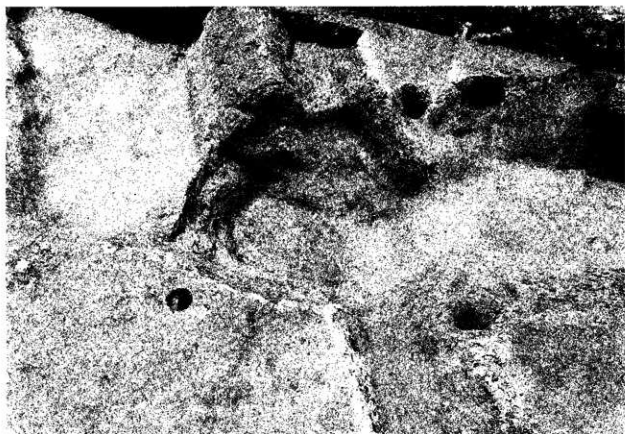
1号古墳跡遺物出土状況



1号独立柱建物跡（西より）



1号土壇（南より）



1号鑿穴状遺構（北より）



1号溝（東より）



2号溝 (東より)



3号溝 (北より)



第6図-1



第6図-2



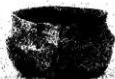
第6図-3



第6図-4



第6図-5



第6図-6

1号古墳跡出土遺物(2)



第6図-7



第6図-8



第6図-9



第7図-1



第7図-2



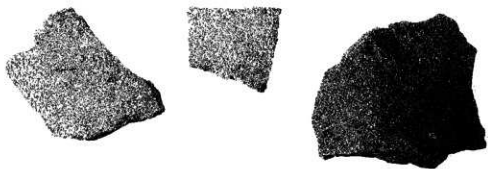
第7図-3



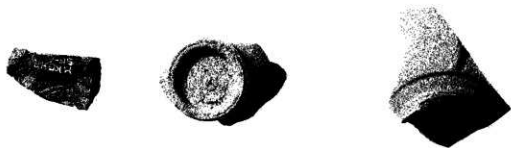
土師器



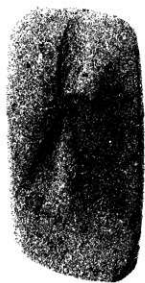
須惠器



中世陶器



近世陶磁器



瓦製砥石



縄文土器

報告書抄録

ふりがな	みなみくがほらいせき							
書名	南久我原遺跡							
副書名	県道大宮上福岡所沢線関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第201集							
編著者名	小野 英代子							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台四丁目4番地1						TEL 0493-39-3955	
発行年月日	西暦 1998(平成10)年3月24日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	道路番号	°′″	°′″			
南久我原遺跡	埼玉県川越市古 市場字久我原341 -1番地	11201	338	35°52'57"	139°31'42"	19950401～ 19950531	500	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
南久我原	集落跡	古墳時代前期・ 中・近世		古墳跡 土塹 掘立柱建物跡 柱穴 溝	1 3 1 15 3	土師器 須恵器 中世陶器 近世陶器 砥石		

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第201集

川越市

南久我原遺跡

県道大宮上福岡所沢線関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成10年3月14日 印刷

平成10年3月24日 発行

発行/財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台四丁目4番地1

電話 0493-39-3955

印刷/巧和工芸印刷株式会社